

# 教育と文化

No.112

平成28年11月1日  
公益財団法人  
愛知教育文化振興会  
岡崎市明大寺町字馬場東62番地  
電話 0564-51-4819

## 「書き虫」から

## 「紡ぎだしコラボする虫」へ

公益財団法人愛知教育文化振興会 副理事長 水野達彦



教師になろうとは思ったが、得手にするものは何もない。生来の怠け者、不器用者で、英語、理科、技術を筆頭に、どの教科も苦手だった。消去法でいったら、国語しか残らなかった。で、今がある。

消去法の強みは、それを極めなければ、もう何も残らないという危機感に、日々揺り動かされることだ。だから、読書の虫になり、そのうち「書き虫」になった。若いころ出会った先輩に「書けない国語教師は不要」と言われた影響が大きい。そんな「書き虫」が、小中学生用の合

唱曲の作詞を始めて、もう二十余年が経つ。自分がプロデュースした国体開始式の集団演技のために、三人の作曲家と組んで、三曲を創った。

そのうちの一曲『不思議』が、CDに収められ、全国の中学校等で歌われるようになった。うれしかった。自分の紡ぎ出したことが、まず、作曲家のからだを動かし、メロディーを得て、さらに、子どもたちのからだを通って、彼らなりの表現となって再構築されることのおもしろさを味わった。その後二人で、片手では足りない合唱曲を編み出した。

しかし、そのパートナーが十年前に夭折。彼の葬儀の式場には、彼と創った何曲かが流れていて、私の胸はつぶれた。「先生、退職するまでに、いっぱい創りましょう」と彼に言われてうなずき、杯を酌み交わした日のことを思った。そして、それがかなわなくなったことを実感

した。  
ところが、数年が経過して、また紡ぎ出す喜びを味わう機会に恵まれることとなった。ある小学校の校歌の作詞を依頼されたのだ。作曲は松井孝夫先生。『マイバード』『そのままの君で』を筆頭に小中学生のための合唱曲を世に送り出し、また、『旅立ちの日に』の編曲者としても名高い。

松井先生とは、若い頃、東京で行われた研究会で一緒させていただき、その後ご縁ができた。さらに現任校が、二十年来、生徒の詞に松井先生が曲をつけてくださっている学校という奇遇にも恵まれた。

松井先生と再会し、交信も復活。お手紙に綴られた松井先生の思いと自らの思いを重ねて、こんな詩を紡ぎ出した。

空の青さに手を届かせたいと願った日から  
もうかれこれ何年が経つのだらう  
叶わぬことに疲れ果てて  
力が出しきれなくなつて途方に暮れた  
あの日  
あなたは真つ先に声をかけてくれた  
色あせてしまった私のアルバムには  
昔と変わらぬあなたの写真が収まっている  
目をそらさないでいてくれて  
ありがとう  
いつも励ましてくれて  
ありがとう  
たとえばあなたは仲間  
たとえばあなたはライバル  
あなたは  
あなたは  
大切な人  
あなたは  
喜び分かち合う  
あなたは悲しみ分かち合う  
分かち合う  
分かち合う  
あなたと気持ち  
分かち合う  
(二番略)

ひと月も経たずして、すばらしいメロディーが届き、その後、混声三部合唱と

して仕上げてくださった。さらに、今夏、この歌を入れた組曲『命』を制作中との便りをいただき、完成を待ちわびているところだ。

たかがことば、されどことば。ネット上に限らず、ありとあらゆるところに、一人歩きするだけのことばがはびこっている。だが、コラボし、思いを分かち合う温かいことばのやりとりこそが、教育を支え、文化を支えるのだと、私は思う。

### もくじ

#### 巻頭言

「書き虫」から「紡ぎだしコラボする虫」へ 水野 達彦

三河教育への提言 水野 達彦  
明るく 元気で 楽しい学校が 一番！ 高本 訓久

三河の文化を訪ねて

中国史学の世界的な研究者

鈴木中正 丸山 幸博

刊行物とわたし

国語の学習・冬休み日誌

教室の窓辺 平井さとみ・林 勝也

平成二十九年出版物の紹介

平成二十八年度個人研究助成

研究成果報告書提出者の紹介

平成二十八年度団体研究助成

刊行物を活用した授業

修学旅行のしおり

教育助成ボランティアグループ活動紹介

西尾・花ノ木小 新城・八名小

特色ある教育活動

行事予定・編集後記 豊川・桜木小

## 明るく 元気で

## 楽しい学校が 一番！

豊川市教育長 高本 訓久



### はじめに

少し前の新聞に、三月小学校を卒業した小六の子どもに「将来就きたい職業」を尋ねたアンケート結果が載っていました。男の子の一位は「スポーツ選手」でしたが、「教員」は医師などに次いで六位（前年六位）。女の子では保育士に次いで二位（前年一位）になっていました。特に、男の子では入学時にはベストテンにも入っていなかったのが、卒業時には六位に、女の子でも入学時四位から順位が上がっているのです。正直、驚いたと

ともに、まだまだ子どもにとって将来の夢になる職業なのだと思います。そんな子どもたちの夢につながる学校がたくさんあってほしいという願いを込めて本原稿を書かせていただきました。

### 一 子どもが元気になる

今年の夏は、リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックを観て興奮・感動された方も多かったと思います。始まるまでは、日本から遠い地で開催されるとか、放送は夜中になるからなどの理由で、盛り上がりは今ひとつという感じでしたが、実際に始まってみると、深夜であろうが早朝であろうが見入ってしまいました。応援してしまっただ人も多かったことでしょう。オリンピックは確実に人々に感動を与えてくれました。様々な競技に力いっぱい真剣に挑戦する選手たちのプレーが、人の心を動かすのです。

私は、子どもたちには「感動する気持ち」を大切にしてほしいと言ってきました。スポーツでなくてもかまいません。音楽でも演劇でも、読書でも日常の人々の行動や言葉であってもいいのです。それらを観たり体験したりする中で、感動してほしいと思います。感動は、自分の心を潤すリフレッシュ効果とともに、相手への尊敬と感謝の心を生み出してくれます。コミュニケーションづくりがうまくできない、他人とかわることに怖さを感じている子が多くなったと言われる現代、一人一人の子どもに感動する気持ち、感動できる心を育てていきたいと思っています。脳科学者の茂木健一郎氏は、「感動することは、人の意欲を引き出すもつとも大事な根本です。感動すると人は変わります。そして、また違う人に感動を伝え、更に大きな感動を呼びます。そこからウキウキした躍動感が生まれます。」と述べています。豊かな感性をもった元気な子どもたちを育てていただくことを願っています。

### 二 教師が元気になる

教師には話すことが求められています。私がよく話すことは、「教師は話で勝負する」です。授業の名人と言われた野口芳宏氏が、本の中で次のように書いてい

ます。「同じレベルの中身でも話し方の如何によってわかったりわからなかったりする。また、楽しく学べたり、つまらなくなったりもする。話し方の技術が低い場合には、すぐにごそごそしたり、よそ見をしたり、隣と（勝手な）おしゃべりをしたり、手遊びをしたりという行動に出るのが小学生共通の特徴である。小学生は残酷なほど教師の話し方技術に対して敏感に反応する。（中略）小学生にとって話の上手な先生は憧れの的となり、その先生に導かれて勉強が好きになり、学校へ行くのを楽しみにしたりもする。話の上手な先生は子どもに好かれ、授業は楽しく進行する。」（『授業の名人』より）

今は、教育環境等も進化し、映像や音声、あるいは具体物で子どもたちにわかりやすく教えてくれる授業が多くなっています。とはいえ、それでも教師の話なくして授業は成り立ちません。すばらしく上手な話し方をしないまでも（なかなか難しいことなので）、子どもにわかりやすい話し方はしたいと思います。

先日、ある講演会で『相手にきちんと伝えるために三つの大事なことを教えてくださいました。一つは、「理解すること」です。確かに相手に何かを伝えようとするとき、まずは自分がそのことにつ

いてしっかりと理解していなければ、いくら話そうとしても十分には伝わりません。伝えるべき内容を十分に理解すること、あるいは自分はまだ何が理解できていないのかを知ること。これは話をする前の大事なポイントです。教師で言えば教材研究にあたるものでしょうか。二つ目は、「表現すること」でした。まさにこれが、いかに話すかという技術の部分にあたります。このあたりの基本的なことは、多くの教育技術に関する本に載っていますし、先輩の教師の指導などでも言われていることです。

教師として私が心がけてきたことは、次の四点でした。細かな説明は省略しますが、おおよそ言わんとすることはわかっていただけなものと思います。一点目は、「はっきりと平易な言葉で話そう」です。二点目は、「できるだけ短く、言いたいことから逸れないように話そう」。三点目は、「できるだけ具体的に話そう」でした。わかりやすい例示というのも難しいことですが、子どもたちの感覚と一致した時の効果は絶大です。最後は、「間を生かす」ことです。子どもたちに聞かそう、聞いてもらおうと思うと、ついつい話し続けてしまいがちになります。また、子どもたちが落ち着いていないと

き、騒がしいときの一瞬の沈黙は、相手の気を引き付けます。そして聞こうとする意識を生みます。教師にとつて、話を止めること、黙ることは、不安を感じるものですが、上手に間を使うことで、より聞き取りやすい、考えやすい話し方になるということもあります。ちなみに講演の三つ目は、「個性を生かす」でした。上手な話し方で子どもとの楽しいコミュニケーションが図られ、元気な教師がたくさんいる学校に期待しています。

### 三 学校が元気になる

いきなりですが、古典落語に『だくだく』という話があります。

間抜けな泥棒が裕福そうな家に入り込みました。ところが、この家の住人は裕福でも何でもない。貧しくて家に何も無いのが寂しいと、絵の上手な人に頼んで壁や戸に、着物がいっぱい入ったタンスやお金がこぼれている金庫、火鉢、なげしには先祖伝来の槍まで描いてもらって楽しんでいたので。そうとは知らない泥棒はいいものがたくさんあるので盗もうとしましたが、絵だと気がつきません。このまま帰るのは悔しいと、物があるつもりなら、こつちも盗んだつもりになつてやれとばかりに、「タンスを開けたつ

もり」「上等の着物を五枚盗んだつもり」「金庫からお金をがばつと取ったつもり」「風呂敷が重くなつて持ち上がりないつもり」などとやっています。そこで、目が覚めた住人。このまま盗まれては大変と、「布団をがばつとはねのけたつもり」「槍を取ったつもり」「泥棒の横腹を突いたつもり」「いてて、何をしやがる。突かれたつもり」「ぐいっぐいっくとえぐったつもり」「血がだくだくつと出たつもり」というのがオチです。

毎年各学校では、学校運営や行事、授業、研修、保護者や地域の方々との活動など、様々な事業について反省をします。一つ一つの活動をしっかりと考え、準備し、実践してきているので、どの活動も教師、子ども、保護者、さらには地域社会にとって意義のあるものであったという自己評価がなされることが多いと思います。それはそれで努力を認め合い、喜び合うこととして大事なことです。気をつけなければならぬことは、こうした活動がいつしかマンネリ化し、昨年と同じようにやれば大丈夫、それなりに満足のいくものになるといった安心感になってしまひ、「ちゃんとやっているつもり」「成果があがっているつもり」になってしまふことではないでしょうか。どこの学校

も若い先生が多くなり、保護者や地域のニーズも多様化し、社会の変化も激しくなっています。これまでの進め方を振り返る中で、「やっているつもり」ではなく、「間違いなくやれてきている」「これからもやっていける」という思いをどの教師もしっかりと持つことが、これからの学校をより楽しく、活気あるものとして充実させていくのではないかと思います。元気のある学校に信頼も生まれます。

### おわりに

保護者の方に言われたことがあります。「先生、うちの子どもが『学校へ行くのが楽しい』と言っています。『だって、先生やクラスのみんなが笑っているんだもん』って。」うれしくなりました。学校は学ぶところです。知らないことを知り、できないことをできるようにしていくところです。学校生活すべてが、決して愉快で、おもしろい場所ではないかもしれませんが、どの子も通いたくなく学校、保護者も通わせたくなく学校である地域からも応援したくなる学校であつてほしいと思います。

今日も三河各地の小中学校から子どもたちの明るい、元気のよい声がたくさん聞こえてきそうな朝を迎えました。